

プロローグ

宇沢弘文

社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような自然環境と社会的装置を意味する。都市は、農村とならんで、重要な社会的共通資本であり、それ自体また、さまざまな社会的共通資本から構成されている、社会的共通資本としての都市とは簡単にいうと、ある限定された地域に、数多くの人々が居住し、そこで働き、生計を立てるために必要な所得を得る場であるとともに、多くの人々がお互いに密接な関係をもつことによって、文化の創造、維持をはかってゆく場である。

第二次世界大戦後、半世紀以上の歳月が流れたが、この間に世界の都市は大きな変貌を遂げてきた。とくに、1960年代の終わり頃までの期間を通じて支配的であったアメリカ的な経済発展のプロセスは、世界各地で、自然、社会、文化の広汎な破壊をもたらし、大きな社会的問題を引き起こしてきた。その影響は都市の場合とくに深刻であった。しかし、1980年代の半ば頃から、ヨーロッパを中心として、アメリカ的な経済発展のプロセスによって破壊された自然と都市を再生し、失われた文化を復活させようという動きがみられるようになった。そして、1990年代に入るとともに、このルネッサンス的運動は、大きな流れとなって、たんにEU加盟諸国だけでなく、その周辺の国々にまで及ぶようになった。

ヨーロッパで都市のルネッサンスというとき、それは14世紀から16世紀にかけて展開された輝かしいルネッサンスと同じ意味合いをもつ。中世の教会的抑圧を超えて、人間的尊厳を保ち、魂の自立を求めようという、真の意味におけるリベラリズムの思想に基づいて、新しい文化の形成、学問的展開をはかるうとするものである。歴史用語としてのルネッサンスは、「文芸復興」、あるいは「学芸復古」という訳語が充てられることもあるが、必ずしも、その意味を的確に伝えていない。ここでは、ルネッサンスの原語のままで使うことにしたい。

日本の都市についてもいま、ルネッサンス的運動が起きつつある。日本の都市、とくに東京、大阪などの大都市は高度経済成長を契機として大きな変貌をとげた。この間に日本の都市は大いに改善され、その内容がゆたかになってきたと思う人は多い。土木工学的、物質的な観点からみると、たしかに日本の都市はよくなってきた。街路の構造、建物の質、デザインという点からみて日本の都市はすくなくとも外見的にはすばらしい変化を遂げてきたといってよい。しかし、都市の本来的な機能という面からみて、はたして日本の都市は、その物理的、土木工学的外見が示すほどよくなってきたのであろうか。さらに一歩進んで、文化的、社会的、人間的な側面に目を向けるとき、日本の都市の多くは必ずしもよくなったとはいえない。逆に、非人間的、反社会的、そして自然破壊的な面が目立っている。この反省に立って、いま日本の多くの都市で、場合によっては周辺の農村と連携しながら、大きな変革が起きつつある。それは、政治的、行政的、因習的な抑圧を超えて、人間的尊厳を保ち、魂の自立を求めようという、真の意味におけるリベラリズムの思想を基調として展開されつつある。ヨーロッパにおける都市のルネッサンスと軌を一にするものである。

各章の内容を簡単に紹介しよう。

第1章「公共空間を人間の手に取り戻す 欧州都市再生の原点」(岡部明子)は、ヨーロッパの都市のルネッサンスを「公共空間を人間の手に取り戻す」という視点に立って考察する。岡部論文では、まず、ヨーロッパの都市のルネッサンスが何故起こってきたのか、その原因をすぐれた建築家の目で見ると。

第1の原因は、人通りが減っていくことに対する危機感である。ヨーロッパの多くの都市では、都市の魅力を象徴するのは、広場や通りに集う人々だった。しかし戦後、ヨーロッパの都市の人通りは減少しつづけた。

第2の原因はモータリゼーションにある。車を中心とした交通円滑化が優先され、車を中心として都市計画が作成されるようになり、車が通りや広場といった都市の公共空間の主役に座り、人は片隅に追いやられていった。

第3の原因は、ゾーニングのもたらした弊害である。ゾーニングはもともと、人の生活の質を守るためのルールとして導入され、人間にとって有害な施設を生活領域から分離する手法として取り入れられた。しかし、都市経済が工業に依存度を高めていくとともに、生活空間より産業立地が優先され、ゾーニングは公共空間の実質的解体を促進していった。

第4の原因は、職住近接、用途混在に対する再評価である。19世紀後半につくられたまちが相対的に再評価されるようになってきた。

公共空間を人の手に取り戻すための試みの一つが、1992年のオリンピックに向けた都市大改造を中心としたバルセロナモデルである。バルセロナモデルは、都市郊外の疲弊地区に適用され、ヨーロッパにおける都市のルネッサンスの典型となった。

この20年間、試行錯誤を繰り返したヨーロッパにおける都市のルネッサンスを通じて、つぎの2つのことがはっきり認識されてきた。第1は、経済の活性化が生活の質の向上とは逆に作用することがあるということ、第2は、疲弊地区におけるフィジカルな建造環境の改善を先行させても、都市の分極化緩和にはならないことである。「都市を人の手に取り戻す」思想を共有した上で、それぞれの都市の歴史と問題を直視して都市再生のシナリオを描き出すことがもっとも優先度の高い課題である。

第2章「ヨーロッパにおける新しい都市づくり ビルバオ、ストラスブールの事例から」(宇沢弘文)では、岡部論文を受けて、スペインのビルバオ・メトロポリ 30、フランスのストラスブールの2つのケースを例にとって、このヨーロッパにおける都市の新しい動きを見る。

ビルバオ・メトロポリ 30は、スペインのビルバオ市を中心として、その周辺の30の市町村から構成されるビルバオ都市圏の再生を目的としてつくられた共同体である。ビルバオ市とその周辺の地域を経済的に支えていた鉄鋼、造船を中心とする重工業は、1970年代に入るとともに急速に衰退して、経済的、社会的に深刻な問題が起こってきた。また重化学工業活動がもたらした自然環境の汚染、破壊もきわめて深刻であった。1980年代に入って、ビルバオ・メトロポリ 30を中心として、再生計画が進められたが、そのクライマックスは、1997年のグッゲンハイム・ビルバオ美術館の開館である。グッゲンハイム・ビルバオ美術館の設計はEUを中心とするヨーロッパの文化的統合を象徴する作品として高い評価を受け、同時に、経済停滞、自然破壊の町ビルバオのイメージを一変した。

ストラスブールは、ドイツとの国境に近い、緑ゆたかな、美しいフランスの町である。ストラスブール市自体は小さな都市であるが、重要な行政的な選択は、周辺の27市町村か

ら構成される CUS という広域地方自治体を通じて行われている。

1960 年代、ドゴール政策は、すべての市民が自家用車をもつことができることを経済発展の重要な目標として掲げたが、その結果、人間的な魅力をそなえ、文化的香りの高い町並みが徹底的に壊される危険にさらされた。とくにストラスブール市の場合、その被害が大きかった。1989 年、CUS の総合都市整備計画を全面的に見直し、市電を中心として、ストラスブールを人間的、文化的、自然的な面からより魅力的なものとし、その経済の活性化を図るという政策が取られた。

第 3 章「都市をつなげる、人がつながる 分権社会ドイツにみる地域公共交通の復権」(傍士銑太)は、ドイツで路面電車を中心にした公共交通機関が復権した背景を探る。

敗戦から高度成長をなしとげたドイツにおける都市の復興は、「人間にとってためになるものは何か」という問題意識を優先し、オルタナティブ文化を重視する。若者を中心にして環境保護を訴えたエコロジー運動が活発化し、環境に対する市民の関心は全国各地域で高まり、さまざまな取り組みが行われてきた。

1992 年リオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議」で合意されたアジェンダ 21 に啓発されて、ドイツの多くの自治体では、ローカルアジェンダ 21 活動を通じて、地域の将来像が市民とともに議論され、具体的なプロジェクトが着実に実行されていた。地域公共交通の復権もこの活動のテーマの一つとして取り扱われ、環境意識の高まりとともに都市と人をつなげる公共交通の役割が再認識されている。たんに国や自治体が管理するのではなく、あるいは企業が個別に市場原理だけにに基づき運営するのではなく、地域社会の大切な共有財産として地域全体が計画的に管理し、都市の人間復興に貢献している。

傍士論文では、ドイツにみる地域公共交通復権の事例とその背景にある価値観を紹介し、日本の都市ルネッサンスに対する有益な示唆を与える。

第 4 章「都市をきれいにする デュアルシステムからの示唆」(竹ヶ原啓介)では、ドイツのデュアルシステムを例にとって、廃棄物処理のあり方を考察する。都市問題を環境負荷の観点から考えるとき、都市を舞台に営まれる社会活動や生活を通じて消費される膨大なエネルギーをいかに抑制するかが大きな論点となる。都市においては、不可避的に発生する廃棄物や下水などに含まれる未利用エネルギーを活用して省エネルギーを進めることや、都市内の活動を一定のエリア内で完結できるコンパクトな市域を形成することにより、移動に必要なエネルギー量を抑制する方策の重要性がしばしば指摘される。都市には大量の物資が流入し、消費後に大量の廃棄物として排出される。またこうした物資を運送するために大量のエネルギーが消費され、その量は都市の規模が拡大するほど多くなるからである。竹ヶ原論文では、このような視点から都市のルネッサンスの問題を考える。この観点から都市の問題を論じる場合に大いに示唆に富む取組みを進めているのがドイツである。都市の物質代謝を最適化するためにドイツがどのような対応を行ってきたかを中心に検討を進める。ドイツでは物質循環の推進が環境中に放出される残滓を削減することで土壤汚染の回避につながっていて、用地リサイクルを容易にし、都市のコンパクト化に貢献している。

第 5 章「都市と資源循環 ゼロエミッション社会への挑戦」(三橋規宏)は、資源生産性という新しい概念を使って、とくに都市に焦点を当てて、循環型社会の基本的性格を考察する。

大量生産方式による経済拡大と人口爆発によって、21世紀の地球は、積み木細工のように脆く、壊れやすい存在になってしまった。これ以上、自然環境を悪化させ、資源を枯渇させてしまえば、人類の生存そのものが不可能になってしまう。破局を避けるためには、地球の限界とうまく折り合っていかななくてはならない。そのためには、これまでの一方通行型社会から資源循環型社会に転換しなくてはならない。循環型社会においては、自然の利用量は減少しているが、社会的厚生は引き続き上昇している。このような状況を、三橋論文では、資源生産性という概念を使って説明する。

資源生産性を高めるためには、企業努力によって達成できるものもあれば、個人のライフスタイルの変更、さらに政府や地方自治体による制度や税制改革など政策誘導によって実現できるものもある。これらの方法を適当に組み合わせることによって、資源生産性を全体として向上させることが可能となる。とくに、大量生産 大量消費 大量廃棄の一方通行型の経済システムを適正生産 適正消費 ゼロエミッションの循環型経済システムに転換させることによって資源の生産性を向上させることができる。また、一極集中型の大都市型社会から、分散型の小ぶりの都市社会へ転換して行くことで資源生産性を高めていくことができる。分散型社会の典型がコンパクトシティの考え方である。

コンパクトシティのような分散型社会では、地域調達・地域循環の原則が貫かれなくてはならない。第1は、地域に必要なエネルギーは地域で調達する原則である。そのためには、持続可能で、クリーンな風力や太陽光、木質バイオマス、コジェネレーションなどの分散型エネルギーの積極的な活用が必要になる。第2は、地域で排出する廃棄物は、その地域で処理する原則である。自分の生活圏に限れば、廃棄物を発生段階で削減しようとするインセンティブは大都市での暮らしと比べはるかに大きい。第3は、地域で生産、製造されたものは、できるだけその地域で消費する原則である。いわゆる「地産地消」である。この原則が定着すれば輸送エネルギーなどは大幅に節約できる。東京のような大都会でも、それを構成するそれぞれの住区が個性あるコンパクトシティに生まれ変われば、その総和としての東京も今日とはかなり違った住みやすい地域になるであろう。

第6章「知」を生み出す 「実体験のネットワーク」としての都市」(酒巻弘)では、技術進化を促進する「生態系」としての都市ないし地域を、シリコンバレーと札幌を例に紹介する。

産業革命以降生まれた大規模工場の周辺には工場労働者が住む工業都市が生まれ、さらに大企業化した企業の本社機能が集まる都市はいわゆる都市労働者を擁する大都市に成長した。そして現在、大量生産を主体とした工業化の時代を超えて、新たな事業や製品、サービスを生み出すイノベーションが中心的な役割を果たす知識化の時代に移行しつつある。そのような21世紀の知識化の時代にはどのような都市の姿が相応しいのだろうか。産業化の歴史の中で都市に限らず、地域など一定の物理的な広がりをもって技術進化が促進されることがあるが、そのような都市ないし地域を「生態系」として捉える試みがなされるようになった。ジョン・シーリー・ブラウンとポール・ドゥグッドは、その産業集積の現場を観察し、マーシャルの産業集積地域における知識の共有を「知識の生態環境」という新たな概念で説明し、マーシャルの経済理論に人間的要素を加えて深化させた。ブラウンとドゥグッドはさらに、知識を共有するためには同じ実体験を持つ者同士が結びつく「実体験のネットワーク」が重要であり、このような「実体験のネットワーク」で結びついた地域や集積は相乗効果を生むと考えた。

酒巻論文では、技術進化と地域経済ないし都市との関わりに関して、技術の社会性や「知」の共有という視点からの分析が展開される。「知」の「生態系」としての都市や地域づくりを考える際に、それらの視点を取り入れることが21世紀における繁栄の条件となるであろう。20世紀において地域としての経済発展が注目されたシリコンバレーは、その源流であるヒューレット・パッカートの創設から60年以上が経過し、そこに活躍する企業の顔ぶれが入れ替わり、働く人々の世代交代が進み、さらに移民など外部からの人材流入が起こるなど常にその姿を変えてきたが、「知」の「生態系」として地域の魅力を維持し続けてきた。21世紀の経済社会を支える地域や都市において「生態系」としての進化を起こさせるためにも、シリコンバレーから学ぶべきことが多い。

第7章「まちなみを創生する 日本における町並み保存の現状と課題」(薄井充裕)は、日本における町並み保存について、その歴史的背景、法制的経緯を明らかにするとともに、現状をくわしく説明し、その課題、将来的展望を論じる。

日本における町並み保存に法律的な骨組みを与えたのが、1975年に制定された伝統的建造物群保存地区制度である。1960年の終わり頃から、公害問題がもっとも深刻化し、国会で関係法令が審議された。日本各地で盛り上がってきた町並み保存のうねりは、開発に対する一種の警鐘としての意味をもっていた。

日本の町並み保存において、各地域別には旧来の市街地や集落に繁栄の時期があり、その後一定の停滞期を経たのち、開発か保全かの分岐点があられ、ここで保存運動や一定の制度化が行われることが多かった。しかし、町並み保存、あるいはより積極的に伝統を正しく継承した町並み創生などを考えるとき、そうした仕組みだけでは限界がある。社会的共通資本としての町並みをまもり、後世に生き生きとしたかたちで伝えていくために、ナショナルトラスト、グランドワーク、公益信託などの手法の一層の展開を図ることが望ましい。かつて広く注目され、過去に実績もあげてきたナショナルトラストや公益信託といった仕組みを、職業的、専門的知見を駆使し、多くのセクターの水平的な協調のもと、町並み保存の一手段として積極的に活用していくことも、すぐれて今日的な課題である。

薄井論文では、数多くの事例をあげて、町並み保存、ないしは創生というすぐれて現代的課題についてくわしい分析が展開される。日本における都市のルネッサンスの実態と理念について、重要な示唆を与えるものである。

第8章「都市と農村を繋ぐ 豊かな農村を再構築する試み」(金子弘道)は、これまでの都市と農村の間にあった壁が徐々に取り払われ、都市と農村が一体になった都市計画や生活空間づくりの可能性を論じる。農村は往々にして都市と対極として論じられてきたが、農村には豊かな自然と安らぎ、都市で失われた人情がある。地方の時代、あるいは地域主義の、疲弊し追いつめられた農山村地域の復権を目指す叫びでもある。その反面、都市住民の農業・農村への関心は近年ますます高まってきた。都市住民の価値観の変化や多様化を通じて、都市と農村の関係は大きく変わりつつある。こうした中で、2001年に施行された新農業基本法は、農村を「地域住民の生活の場として農業が営まれている」と規定し、農村を「生活の場」と位置づけた。農村を「農業生産の場」と位置づけた旧農業基本法からの大きな方向転換を意味する。

農村は日本社会の基礎的な部分である。自然とのふれあいを通じた人間形成、水田や森林の環境保全機能などは社会の安定性を支える重要な要素である。こうした機能を活かしていくには農業だけでなく、農村の自然環境、農村文化などを総体的にとらえていかなければ

ればならない。金子論文では農村で始まった内発的なむらづくり、あるいは都市・農村連携を実例に沿って検証する。なかでも、農業環境保全のシステムとしての農家がつくる株式会社の役割について立ち入った考察がなされる。

第9章「草原を維持する 阿蘇に学び連携する都市住民」(前田正尚)は、農村と都市住民が連携し、畜産振興やボランティア活動等により阿蘇の草原の保全を図りながら、豊かな生活空間としての農村を創設しようという壮大な試みについて考察したものである。阿蘇の草原の「入会」はいわゆる「コモンズ」であり、危機にある草原の維持・管理をどのように行っていくかが課題である。

年間1,700万人を超える人々が訪れる阿蘇は、国際的な観光資源であるだけでなく、阿蘇の景観を代表する草原は九州の草原面積の約半分を占める地球規模での貴重な自然遺産であり、次世代に引き継いでいくべき大切な社会的共通資本である。しかし、この阿蘇の緑の大草原は荒廃の危機に直面している。畜産農家の減少や高齢化、さらには、牛肉輸入自由化が決定的なダメージとなり、草原の維持に欠かせない野焼きを行う面積が減少の一途を辿っている。このような状況のもとで、農村と都市住民が連携し、畜産振興やボランティア活動等により阿蘇の草原の保全を図りながら、豊かな生活空間としての農村を創設していこうとする壮大な試みが芽生え始めている。前田論文では、あか牛や地元産品による「スローフード」を中心にした食の「多様性」を維持しさらに深めつつ、牧野組合、地元住民、行政、企業、都市住民、研究者、ボランティア、全国各地の草原関係者等の「関係性」を一層築くことにより、畜産を維持し、野焼き・輪地切りを行い、コモンズたる公共空間としての草原が「持続可能」になり、さらに自立共生し、他者ととも生き、みんなと一緒にいきいきと楽しい阿蘇、イヴァン・イリイチの意味ので「コンヴィヴィアリティ」そのままの阿蘇を求めて、都市と農村の連携が進みつつあることを論じる。

以上のように、本書ではまず、ヨーロッパにおける都市のルネッサンスの実態と理念について、ドイツ、フランス、スペインなどを中心に、いくつかの都市の事例をあげながら考察している。ついで、都市をきれいにし、ゼロエミッション、「知」を生む生態系としての都市、まちなみの創生といった視点から、その実態と理念を探る。さらに、農村と連携して、都市の文化的、自然的復活をはかり、同時に豊かな農村を再構築する試みについて、数多くの事例をあげながら考察するものとなっている。